

## 残照

大森 海太

緊急事態宣言下の連休中の一日、他府県移動の禁を犯して神奈川県のカントリークラブに出かけた。初夏を思わせる絶好のゴルフ日和で、いつものメンバー四人の集まりである。

この日はクラブの開場記念杯ということで、各自上位入賞を目論んで出走したものの、競技会なのでノータッチ、ホールアウト（OKパットなし）ということもあつてイマイチ調子が出ない。

「飛ばなくなったよなあ。トシのせいで筋力が落ちたんだけ」

「最近ヨセが苦手になった。トップしたりダフったり」

「短いパットが入らないよ。いつもならOKなのに」

とかなんとか、言い訳するやらボヤクやら。それでもニ密とは逆の広々としたコースで、日々の巣ごもりのウサを吹き飛ばす。

プレーが終わって風呂から上がると、クラブハウスで待望の十九番ホール。幸い酒類の提供が許されているので、向かい合わせを隔てるアクリル板も取り払ってさっそく飲み会が始まる。

「こうやって飲むのは久しぶりだよなあ」

「オンライン飲み会じゃあ気分が出ないもんねえ」

というわけで後期高齢の爺さんたちの宴は、現役時代の自慢話や共通の知人の噂話などで大いに盛り上がり、

「でもいつまでこうやって元気でいられるかなあ」

「スコアなんかどうでもいいよ。ゴルフが出来てみんな酒が飲めればそれで十分だ」

「そうだそうだ。さあ、次回の日取りを決めよう」

クラブバスで最寄りの駅に来て皆と別れ、帰りの電車に乗る。

仲間と楽しんだ半日を思い浮かべつつ窓の外を眺めていると、沿線の木々や建物が夕陽に照らされて、最後の輝きを見せている。昼時の光線とは違ってどこか弱々しいが、その分だけ美しくもある。「残照」という二文字が頭に浮かんだ。

ほろ酔いでウトウトするうちにふと、カズオ・イシグロの『日の名残り』を思い出した。落魄の老執事が落日を見て落涙するという話だったか、今の雰囲気とはだいぶ違うけど……。

いつのまにか東京駅に着くと、あたりはすでに薄暗くなっていた。